説教要旨　「父なる神に従って」

ルカによる福音書２章３９～５２節

イエス様が１２歳になった年のこと。イエス様は両親に連れられ、過越祭のためにエルサレムに上りました。祭りの期間が終わって、彼らはこの一週間の祭りの期間をエルサレムで過ごし帰路に着きますが、両親は途中でイエス様がいないことに気づきました。エルサレムへと引き返しつつ、親類や知人の間を探し回りますが、イエス様は見つかりません。探し始めて三日目に神殿に行ってみると、その境内で「学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられる」（46 節）イエス様をようやく見つけるのです。息子を見つけた両親は驚き、母マリアは「なぜこんなことをしてくれたのです」（48 節）。と諭そうとしますが、イエス様は「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前」（49 節）。と答えます。「両親にはイエスの言葉の意味がわからなかった」（50 節）。自らに与えられた神様からの使命を明確に自覚するイエス様と、それが理解できずにいるの両親との対比がここにあります。それは言うなれば、自立した一人の大人として歩みだした我が子の姿に戸惑っている子離れできていない親の姿です。

エルサレムの都に上る時、イエス様は両親に連れられていました。しかしエルサレムを離れる時は違っています。「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」（51 節）とあるように、その行動の主体はイエス様にあります。イエス様が自らの意志で、両親と一緒にナザレへと下って行き、そしてそこで両親に仕えて暮らしたのです。ユダヤ教において子どもと大人のちょうど狭間にある１２歳の時に、イエス様は父なる神様の子として、神様に与えられた使命を果していく者としての自覚を明確に持ち、自らの意志で歩みだされたのです。けれどもその歩みは、両親に背き、両親から離れて生きることではありませんでした。自らの使命をしっかりと見つめたうえで、ナザレに帰り、両親に仕えるのです。イエス様は、両親に従って両親に仕えるのではなく、両親に逆らって神に従うのでもなく、神様に従って両親に仕えられたのです。

（２０２０・１・５　説教者：稲垣真実）